

## 校内別室教室の効果的な利用について

### 不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、3学期より不登校が継続し、進級した4月から別室登校を利用している。4校時に登校し、自主学習、読書、カウンセリング、給食などで、5校時まで過ごすことができるようになっている。

### 具体的な取組

#### ●校内別室教室

不登校生徒の在籍学級への復帰に向けた段階的な登校手段の一つとするとともに、一日の全てを在籍学級で生活することが困難な生徒がひと休みできる場所として、校内別室教室を設置している。3・4校時（自習）と給食を自分のペースに合わせて利用することができる。加配教員を担任として置き、出席や活動状況等を記録し、相談活動も行う。



#### ●一人一台の学習者用端末の利用

毎日11時から、「カルガモ教室」の担任が、オンラインで学活を行っている。登校している生徒とともに、自宅にいる生徒も参加している。一人一台学習者用端末を活用し、オンラインで顔を見ながら健康観察や連絡、会話をしている。

#### ●「hyper-QU」研修

hyper-QU（より良い学校生活と友達づくりアンケート）を年間2回実施し、結果の分析及び活用方法について、外部講師による校内研修を実施している。不登校リスクの高い生徒を把握し面談を実施するとともに、学級の課題解決につなげ、不登校の未然防止を図っている。



#### ●ICT 学習教材の活用

「カルガモ教室」での自習、及び、不登校生徒の家庭学習に ICT 教材を活用し、映像授業とデジタルドリルで学習する。学習履歴が残り、学級担任や教科担当が学習状況を確認することができる。

### 成果

- 不登校生徒の約半数が校内別室教室を利用し、登校への最初のステップとして定着しており、在籍学級へ復帰した生徒もいる。登校できない生徒も、オンラインでは教員と全員つながることができた。
- 不登校リスクの高い生徒に、「hyper-QU」を活用して早期に対応できた。

### 課題

- ◆ 校内別室教室から在籍学級への復帰に向けて、スモールステップの目標を設定し、徐々に実践可能なことを増やしていく。

## 生徒が、新たに不登校にならない未然防止の取組について

### 不登校生徒の状況

当該生徒は、複雑な家庭環境で育ち、学校で集団生活を送ることに抵抗感を示している。その他の生徒の中には、いわゆる中1ギャップにより、環境の変化になじめなかったり、学習についていけなかったりすることが起因している生徒もいる。

### 具体的な取組

#### 【生徒とつながる毎日の生活記録】

全学年共通の「デイリーライフ（毎日の生活記録）」を通して、日々の健康観察を行うとともに、文章でのやり取りによって生徒とコミュニケーションを図り、小さな変化にも気づき、素早い対応ができた。



#### 【校内別室教室「プレップ教室」】

学校図書館を教室とし、不登校状態にある生徒を対象に、主に、国語・数学・英語の3教科を指導している。本人の意向で指導内容を変更することも可能である。一人の教員で対応せず、時間割に担当者を割り当てて運営することで、持続可能な体制を整えている。

#### 【密な連絡体制とICTの効果的活用】

学級担任を中心に、生徒の欠席が3日以上続いた場合には、校内での様子など、小さなことでも電話で家庭と共有している。

また、生徒の実態に応じて、自宅に持ち帰りをしている一人1台の学習者用端末を活用したオンライン授業及びオンライン面談を実施している。

#### 【新たな居場所の開設】

「プレップ教室」とは別に、不登校傾向で集団生活に不安がある生徒を対象とした居場所「サポートルーム」の開設を進め、使用していない教室を整理し、個別対応ができる場所を整備した。教育相談を行い、コミュニケーション・スキルを身に付けることにより、不登校を未然に防止する。

### 成果

校内別室教室「プレップ教室」を継続し、生徒の新たな居場所「サポートルーム」を整備した。不登校生徒及び家庭との電話等でのやり取りを途切れることなく継続した結果、不登校生徒のうち7人が、合唱コンクールに参加することができた。

### 課題

家庭支援の充実を図るため、SSW等の関係機関との連携をさらに強めるとともに、個のニーズに細やかに対応ができるよう選択肢を増やす。

## 不登校生徒の学習支援について

### 不登校児童・生徒の状況

小学校の頃から不登校傾向の生徒も多く、入学後、授業についていけない不安から、学校に登校できていない生徒もいるが、学習支援教室を利用することで、教職員との関わりをもちながら、学校で過ごすことができるようになっている。

### 具体的な取組

#### 【学習支援教室】

生徒は、一日 3、4 時間、学習支援教室を利用することができる。不登校加配教員を含めた教職員や学生ボランティア、教育支援ボランティアが指導している。現在 4 名の生徒が教室復帰を目指し、数学や英語の学習に取り組んでいる。



#### 【1人1台の学習者用端末の利用】

各教科担任が、Google Classroom に定期的に、授業で利用したプリントやその模範解答・各種便り等を投稿している。また、担任が、不登校生徒に直接メッセージを投稿し、チャット形式で生徒が担任とコミュニケーションがとれるようにして、登校への意欲をもたせるようにしている。

#### 【校内における組織的な対応】

管理職・特別支援教育コーディネーター・SC・SSW・生活指導主任・養護主任・各学年の教職員で週に 1 回集まり、生徒情報を共有し、不登校生徒への個別支援の内容や必要性、方向性等について話し合っている。

#### 【WEBQU】

生徒一人一人の支援のニーズやいじめ被害・不登校等のリスクを抱える生徒の把握・未然防止のために、全校生徒を対象に、年に 2 回実施している。また、外部講師を招いて校内研修を実施し、目的と見取り方を全職員で共有し、学んでいる。

### 成果

現在 1 年生に、登校日数が 0 日の生徒はいない。学習支援教室に通ったり、特定の時間に登校したりと、何らかの形で登校している。多くの不登校生徒が学校と何らかのかかわりをもつようになり、不登校出現率は昨年度より 2.7%減少している。

### 課題

学習に関心がない生徒や登校の意欲が出ない生徒がいる。学習者用端末の利用等をより充実させ、学習支援や登校意欲を感化させる必要がある。